

安倍晋三元首相の国葬が営まれた九月二七日。厳戒態勢の中、会場の東京・日本武道館周辺に多くの弔問者が訪れた一方、全国各地で反対のデモが行われた。憲政史上、最も長く首相を務め、凶弾に倒れた政治家を送る国葬としてはあまりに異様な空気がだった。

死してなお分断が残ったのは、国会議論を経ずに国葬が行われたからだけではない。その要因は、国民の分断を広げた安倍氏の政治手法にある。自らの敵と味方を明確に分け、敵とみなす相手には「こんな人たち」「悪夢の民主党政権」などと言葉を選ばず批判する。一方、森友・加計学園問題や「桜を見る会」に象徴されるように、身内優遇との批判は絶えなかった。インターネット上では「親安倍」「反安倍」ののしり合いが今も続く。

忘れられないのは、二〇一九年参院選の選挙戦最終日の光景だ。自民党総裁の安倍氏は東京・秋葉原駅前前で演説に立ったが、大量の警官が動員され騒然とする中、聴衆が「安倍やめろ」と書かれた横断幕を掲げようとすると、支持者が自民党ののぼりですそれを隠そうとする。会場では日の丸の小旗が振られ、あちこちで小競り合いが起きた。

## 分断の政治、その先は

どうしてここまで日本は分断されてしまったのだろうか。安倍氏は接するとユーモアがあり、周囲を笑顔にさせる人物だ。酒はほとんど口にしないが、宴席などでは気配りを欠かさず、場を盛り上げる。その人物像と、秋葉原の光景の落差に当時は戸惑いを覚えた。

だが、一方で分断は政治の大きな潮流なのかもしれない。匿名の批判が飛び交うインターネットの普及や、分断を政治力の原動力としてきたトランプ前米大統領の登場によって、分断は至る所で拡大していったからだ。振り返れば、小泉純一郎首相が郵政民営化に争点に敵・味方を分け、衆院選で大勝したことも、こうした流れの中にあつたのではないか。

もともと安倍氏は、政治思想への賛否が分かれやすい存在だった。憲法改正や日米同盟の強化など、自民党政権が曖昧にしてきた部分を若いころからより明快な形で提示してきたからだ。特に第二次政権発足以降は右派を盤石な支持層とする狙いもあり、リベラル勢力への攻撃的な姿勢を隠さなくなつた。こうした要素が重なり、世論の分断は加速していったといえる。

ただ、世の中はそう単純ではない。象徴的なのが安倍氏や自民党と、世界平和統一

家庭連合（旧統一教会）との関係だ。安倍氏銃撃の動機を巡ってその関係に注目が集まり、世論の批判が高まっている。韓国にも強硬な姿勢が目立った安倍氏と、反日的な主張を持つ韓国の教団になぜ接点があるのか。教団創始者と親交のあつた祖父・岸信介元首相から続く血脈から見れば不思議はないのだが、釈然としない思いを持つ保守派は多いのではないか。

世界的にはロシアによるウクライナ侵攻でより国家主義的・好戦的な主張が支持を得やすい環境が生まれた一方、格差の是正や気候変動問題などに取り組む若年層「ジェネレーション・レフト」も登場している。国内では夏の参院選で参政党の保守層への食い込みが話題になつた。分断は複雑さと深刻さを増している。

ともあれ、この十年ほど日本社会の分断を象徴してきた政治家はこの世を去つた。政治とは本来、相反する利害を調整する作業のはずだ。複雑化した分断を解きほぐしていくのは時間がかかり、国民には分かりにくい作業かもしれない。それでも分断を取り返しのつかない衝突に発展させないためには、民主主義を信じて議論を重ねていくことしか、道は残されていない。